

会寧から三十八度線突破まで

東京都 川和田 康夫

一 祖父の自決

昭和二十（一九四五）年八月。僕の家は朝鮮咸鏡北道会寧郡会寧邑にあった。父、母、姉、妹二人、それに母方の祖父母の八人家族である。祖父は、初夏のころから病床に伏せていた。

ある日、父が拳銃を家に持ち帰った。邑長からの、もらい物らしい。象牙の銃把がついた回転式六連発である。日射しの強い日の午後だった。僕にも撃ってみると言う。もちろん弾は入っていない。型通りに右手人差し指を引き金に掛けて引こうとしたが、バネが強くて子供の力ではびくりとも動かない。左手人差し指を添えて引くと、やつとカチツと音を立てて撃鉄が落ち、弾倉が一こま回転した。もし無事に京城（ソウル）まで落ちのびられたら、僕にこのピストルをくれるという。

途中避けては通れないだろう戦闘場面がちらっと心をかすめたが、期待の方が大きく膨らんだ。僕も皇国少年の一人だったのだ。

八月十二日午後四時前後だったと思う。父がその拳銃を持って祖父の病室に入っていたが、しばらくして父の号泣が聞こえた。祖父は、拳銃をくわえて覚悟の自決を図ったのだ。私は、傍らで洗濯物をたたんでいた母の横顔を盗み見た。母は、僕らが先生にビンタを張られた直後みたい、衝撃と覚悟がない交ぜになった表情を浮かべていたが、私たちには何気ない風を装っていた。だが、このときは撃鉄に故障があつて、自決は果たせなかった。祖父は、私たちの避難行の足手まといになるのを嫌ったのである。翌早朝に、大量の阿片を飲んで再び自決を図った。当時、僕は何も知らずにいたが、これらの事情は後々に母から聞いた話である。

十三日に、集結場所からいったん帰宅して昼食を食べ終わるころ迎えがきて、僕らは慌ただしく

出発することになった。縁側の踏石から、運動靴を手に持って玄関に運ぼうとした僕は、「畳の上で履いてもいいんだ、こんなときは」と大声で父にどなられた。心労が重なって、父もいらいらしていたのだと思った。家を出るとき、障子の破れ目から祖父の病床をのぞくと、祖父は右肘を上げて、ゆっくりと蠅を追う仕草をしているのが見えた。横顔も穏やかな表情に見えたが、これが祖父を見た最後となった。私たちは、後ろ髪を引かれるような思いであった。

二 昭和二十年八月

「ここは朝鮮北端の、二百里余りの鴨緑江……妻も銃取り応戦す」これは北境警備警察隊を唄った歌だという。朝鮮と中国は大河によって隔てられているが、白頭山を境に、西に流れるのが鴨緑江、東に流れて日本海に注ぐ方を豆満江という。会寧は豆満江の右岸にあるが、まさに朝鮮の北端である。対岸には中国の広野が見渡せた。

父は当時、会寧郡守（道郡制の郡長官）をして

いた。僕は国民学校四年生、姉は六年生、上の妹紀子は数えて五つ、下の雅子は数えて三つであった。

このころになると授業時間は減り、勤労働員で校外作業に出ることが多くなっていた。僕ら中級年生は松根油掘りや、飛行場での小石集めに行かされた。会寧は軍都でもあり、歩兵や工兵の連隊、それに飛行連隊もあった。飛行場は豆満江の支流、会寧川の向こう岸にある。生徒たちは、飛行場の中で小石を拾って台形に積み上げるのである。これは敵の爆弾投下によってできた穴を埋めて、迎撃機を速やかに離陸させるためのものだった。八月になると、空襲警報のサイレンでこの作業が中止になり、帰宅させられるようになった。走って家に帰る僕らの後ろから、ソ連軍の飛行機が追い越していった。朝鮮人の少年たちが狭い橋ですれ違うときなど、以前はこちらの顔をうかがっていたのに、今ではうんと態度がでかくなっている。路地でパッチ（メンコ）をしていても好戦的

態度である。何かが変わりつつあった。

夜になると、遠く羅津方向の空に、探照灯の光芒がせわしなく闇を掃く様子が眺められるようになった。庭に掘った防空壕の入口に立つと見えるのである。さらに空襲警報のサイレンが一層不安をかき立てた。

そしてついに八日の夜、羅津は大空襲を受けた。今考えてみると、ソ連軍の対日参戦当日だったわけだ。南東方面の夜空がたき火のように揺らめいている。羅津にはこの直後ソ連軍が上陸、市街戦が繰り広げられ、多くの市民も犠牲になったことを後に知った。遺された父のメモによると、「八月十一日夜、政務総監発『日本人官公吏及びその家族並びに親日朝鮮人は茂山を経て平南に避難すべし』との電報が郡守宛に届いた」とある。この日の深夜、主だった日本人が避難方法について協議し、「歩くよりほかに方法なし」と一決したという。

八月十三日午前八時「撤退準備」が、ついで午後五時「撤退開始」が放送された。こうして我が

一家の退避行が始まった。このときには既に、祖父の病原菌は僕と妹雅子に感染していた。渋り腹で何回も続く下痢便。夜中になって、山の斜面にへばりつく小さな集落に入り、朝鮮農家に仮泊したが、翌朝農家のおかみさんが下痢にはこれが一番と、飼犬の牙を抜いて黒焼きにし、これを砕いた粉をお湯で溶いたものを、大どんぶりになみなみと注いで、二人分用意してくれた。口を付けてみたが、苦すぎてとても飲めた代物ではなかった。ところが、たった三つの妹がどんぶり一杯飲み干してしまったのだ。僕は「治りたい一心なんだなあ」と、妙に感動したことを覚えている。

父は、ここから家族と離れて単身会寧に引き返した。市内は、十五日夜の放火で目抜き通りの家並みは焼け落ち、住民は一人も見当たらなかったという。このとき日本人はまだだれも敗戦の事実を知らなかった。父は馬を手に入れて、八日遅れでやつと茂山にたどり着いた。この町も住民はとうに逃げ去って町中が閑散としていた。お医者さ

んが一人だけ居残っていると聞いて、母は妹と僕を連れて行った。お医者さんは二人を診て、母に「男の子は助かるかもしれないが、女の子は助からないでしょう」と言った。祖父、妹、僕がかかった病気は、後の父の言によるとアメーバ赤痢ということになるが、確かなことは分からない。とにかく重い腸疾患で風土病の一種らしい。

茂山発最後の列車、それは有蓋貨車一両、無蓋貨車一両、全二両という脱出用特別編成で、子供の目にも小さくて頼りなさそうな蒸気機関車がついていた。汽車はのろのろと進んだ。車両には、鶏一羽分の余地もないほど人と荷物が詰まっている。我が家族は無蓋車組になった。だれかが風呂敷に包んだ鍋を落とした。「からんからん」と音を立てて転がっていく。まだ明るいのに月が出ていた。突然「あら、ヒトダマ!」と、母がつぶやいて空を指さした。見ると紙風船ぐらいの大きさで、煙の塊のような紫色の球が、尾を引きながらふわふわと流れている。これは日中のことであつたが、

左側のまばらな林の中から人が現れた。この暑いのに軍用冬外套を着て着剣した歩兵銃で武装した正規兵、五、六人であつた。列車を見つめるや、「乗せてくれ」と叫びながらばらばら駆け寄ってくる。列車は止まった。このときである。列車の護衛警官が、銃を携えて有蓋車の屋根にするすると登った。足下の白いスパッツ（靴の上部に付ける短いゲートル）が目立った。仁王立ちになった警官は「貴様らが負けるからこんなことになるんだ!」と叫んで、腰だめで四、五発実弾を連射した。割り切れない表情をして苦笑いしている兵隊たちを尻目に、列車は再び氣息奄々と動き出した。

三 南へ、南へ

避難民の群れはとにかく南の方角を目指して歩く。また歩く。今日はどこそこまでという目途も立たず、日が暮れたその場所で野宿する。あり合わせの衣類や風呂敷などをかぶって寝るのだが、朝起きてみると上掛けはじつとり夜露に濡れていた。

子供を三人連れた母親を見かけた。背中に赤ん坊をおぶり、二歳くらいの子は右手に抱きかかえ、五歳くらいの子の手を引いている。母親は追いついていく人々の視線を浴びて、照れているようにも見える。この一家の今後がどうなるのかと考えると、十歳の僕でも不安になってくる。一体、食糧はどうするのだろうか。五歳の子はどれだけ歩き続けられるのだろうか。お父さんはきっと兵隊にとられたのだろうか……などと、他人事ながら考えてしまった。

中庭に麻が植わっている農家で、休憩させてもらったことがあった。その若主人が、父の耳元で何かささやいている。三、四人で応急担架を造った。そして、部屋の隅に一人で寝かされていた老婆を乗せて、我々のグループで運び出した。しばらくして川原に出た。おばあさんには言い聞かせるようにして、優しい声で「ちよつとここで休憩するからね」と告げておいて、その場に残してきた。

僕は下痢便のために、度々道端にしゃがまなければならなかった。血便である。当然ながら紙などない。周囲にはえている雑草の葉などで拭く。

大豆の葉は広くて使い勝手が良かった。田圃の周囲に大豆を植えて、米の生育を助けるといふ農法のおかげで、大いに助かった。この下痢は栄養不良とも重なって、その後一年ほど続いたが、途中で脱肛するようになった。肛門周囲の筋肉が落ちて直腸を支えきれなくなり、排便で力むと腸が裏返しになって、七、八センチメートルぐらい垂れ下がってくる。用後は草をあてがって、そっと押し戻してやるのである。僕はその上、右山人差し指がひようそうにやられた。薬も何もない。腕を下げるとじんじん痛むので腕を心臓より上にあげ、人差し指を空に突き立てて歩いた。五十七年経った今でも、右山人差し指には爪がない。

その後、朝鮮の村や町に私的自警団が次々に誕生していった。旧日本軍の軍服に赤い腕章を巻いた朝鮮人青年たちが中心になり、自ら「保安隊」

と呼称していた。その警戒、取り締まりの対象は、疲れ切つてとぼとぼ歩いている日本人避難民である。風体からすれば確かに怪しい限りだが、その実体は年寄りと女子供を中心とする三、四十人ほどの小集団なのだから、治安を乱すほどの体力も気力も持ち合わせていないことは分かるはずである。しかし、集落の入口には柵を構えて必ず保安隊員が待ち構えていて、手荷物検査をするのだった。金目のもの、珍しいもの、それに現金も取り上げられた。敗戦国民に贅沢を許すわけにはいかないということなのだろうか。我々の方でも、そのうち部落に入ると自主的に道の両側に一列に並び、リュックサックや包みの口を広げ「何でもどうぞ、持つて行って下さい！」というジェスチャーを示すようになった。別にヤケを起こしたわけではないが、このころになるともう着の身着のまま、所持品といつても、もうボロ同然の夏衣類と若干の雑貨くらいしかなかったのである。

こんな事態において、実に上手に隠しきった二

つの例を知っている。一つは、いつも白布に包んだ骨箱を胸に吊って歩く、中年の男性の例である。実は、中身は遺骨と共に宝石類が入っていたそうだ。保安隊員に、箱を振ってみて中を開けさせられ、宝石が出てきたのだ。差し出そうとしたら、「いらぬ、いらぬ」と手を振られたとのことだった。儒教心の厚い国民性をとらえた、うまい方法だと感心したことであった。もう一例は、百円紙幣を編みあげて買物籠を造り、この中に赤ん坊のウンチのついたおむつを入れて持ち歩いたという女性の話だ。僕はこの方法を真似てやろうと、しつかり胸の中にしまい込んだのだった。

保安隊にはもう一つの隠された目的があった。日本官憲に対する復讐である。特に警察関係者が目の敵にされた。また、日本側に雇われていた朝鮮人は、裏切り者として断罪されていた。父は終戦当時会寧郡守だったから、二度やられた。最初は検問所通過後に、追いかけてきた男たちに両腕を抱えられて拉致された。父は朝鮮人を迫害した

ことは一度もないという自負、戦中でも軍の言いなりにならなかったという自信があつて、関門ではいつも堂々と前職を名乗っていたのだ。しかし、これが裏目にてた。戦中の生き方を知っている人などそばにいるわけもなく、あらゆる通信手段は途絶していたのだから、到底無理だったのだ。翌朝、便所の小窓から脱走して、家族の元へ帰り着いた。二度目は城津に近い農城という所だった。この保安隊には、庭先に拷問小屋が建てられているのが囲いの外からも見えた。この中に引っ張り込まれた父が、竹刀や棍棒で一時間にわたって殴打されたのである。上半身に無数の傷を付けられ腫れあがった姿で、二人の日本人に助けられて出てきた。このとき「警察署長、邑長を銃殺した。お前も銃殺すると言われた」と父のメモに残っている。

四 雅子の死

話は茂山からの列車を降りた時点にさかのぼる。ソ連軍の進駐を楡坪駅で迎えた。まず、前日まで

に武装解除を受けた。父も家伝の日本刀、拳銃を提出し、丸腰になった。日本人は駅周辺の空き地に集められた。そのうち、どこからともなく朝鮮人たちが多数集まってきた。群集が駅構内を埋め尽くすと、初めて聞く行進曲風の合唱が湧き起った。「ソンバリツパール、プルギツパール、ノツピツルツルギノハンダ……」と聞こえる。あとで知ったことだが、これが「インターナショナル」だった。それにしても、この人たちはいつどこでこの歌を覚えたのだろうか。不思議でならなかった。列車がゆっくり入ってくると「マンセー、マンセー（万歳、万歳）」の大合唱が起こった。息を詰めて見ていると、軍服を着ているが、つば無帽をかぶり、靴を履かず足にボロ切れを巻くという出で立ちのソ連兵が、マンドリン銃を肩にして蒸気機関車のボイラー部にぶら下がつて、陽気にはしゃいでいた。

さて、それから大変なことになった。早速にソ連兵による日本人への略奪、強盗が始まった。我々

はゴザ一枚の露天生活である。ソ連兵は二人組でやってきて、いきなり銃を突きつける。ホールドアップしている腕から時計を奪う。そして現金。父の所にも午後やってきた。父が銀行に行ったときには、高額紙幣は払い出してしまつて、五円など小額紙幣しか残つていなかった。やむなく五円札を分厚く腰に巻いていたので、まるで盗つて下さいと宣伝しているような具合だったのである。あつという間にずると引き抜かれてしまつた。だが、時計があるならお金は返しても良いという仕草をする。父が持つていた銀時計は会寧脱出の際、馬一匹と交換して今はない。結局無一文になつてしまつた。周りの方から同情の寄付金を頂いて、その後を過ごすことになつた。

ソ連兵たちは、奪つた腕時計を三つも四つも毛むくじやらの腕に巻いて、子供のようにはしゃいでいた。中には、耳に近づけて音を聞いて、ここにこしている者もいるという具合だつた。今ここにいる兵隊たちは、刑務所からかり出された四人

だという。夜になると、若い女性たちがいずこへともなく連れ去られた。僕には、女性がその先どうなるのか皆目見当がつかなかったが、大人たちの気配から、子供には秘密の何か良くないことが行われているらしいことは感じ取つていた。

ソ連兵はオモニ（朝鮮婦人）たちにも不評だつた。兵隊目当てに早速露天市ができた。例えば、炒り豆やするめなどを並べた店だつたが、兵隊たちは自分の帽子を皿代わりに品物をたっぷり入れさせて、片手で帽子を、もう一方の手でぼりぼりやりながら歩き回つたが、結局金は払わなかつた。品物をただ取りされたオモニは、自分の鼻先に握り拳を継ぎ足して、鼻の大きいソ連兵をまね「ヨクナイ！」と付け加えて、隣のオモニに目配せをしていた。

楡坪駅から有蓋車二両をチャーターして逃げることになつた。八月三十一日の夕方のことである。地面から貨車の床まで、板を渡しかけ乗車した。母が第一歩を踏み出したとき、突然素つ頓狂な声

を出した。「あつ、雅ちゃんの足が冷たい。父ちゃん、見て！」母の右手が、おんぶした妹の小さな右足を握っている。一足先から雅子の顔をのぞき込んだ父が、顔を横に振った。死んでいた。

五 咸興

逃避行が始まって約一カ月余り、九月上旬城津付近から貨車に乗って元山へ向かった。が、発見されてしまい、逆送されることになった。途中、咸興駅で集団強行下車をした。約二千人の避難民が乗っていたと推定されるが、朝鮮側もこの人数では阻止のしようもなかったのではないだろうか。ここから歩いて南下を続ける人たちもいて、集団はだんだんと小さく分かれていった。咸興駅前の広場で野宿したが、翌日、一発の銃声によって郊外の川原に退去させられて、そこで十日間ぐらいの野宿が続いた。雨が降ると、それはもう氷雨だった。畑の畝と畝の間に、身をすっぽりとほめ込むようにして寝ると、少しは暖かい。朝、畝合いから頭をあげて見ると、隣の畝間にも頭の上の方

にも決して起きあがることのない人がごろごろ横たわっていた。僕の周りの、咸北グループ約三百人のうちの約一割の人が死んだということ聞いた。

その後、咸興の日本人世話人会から迎えがあつて、市街に戻った。ソ連軍の許可が出たらしい。僕ら一家には磐龍台町にあつた元下宿屋さんの二階、八畳一間が割り当てられた。冬に入って寒気が厳しくなると、積もる疲労、栄養不良、飢餓、病気と、日本人がどんどん死んでいった。

「再帰熱」という病気がはやって手がつけられなかった。この病気は高熱が何日も続き、この間昏睡状態になる。食事も摂れないから、それまでに残されていた体力にすべてがかかってくる。一時小康状態になつても、再び高熱が出る。再帰熱と言われるゆえんである。死亡率がきわめて高く、感染力も強い。咸興で亡くなった人は、先の野宿地近くの山裾に掘った溝に、折り重なるようにして葬られた。上からばらばらと薄く土を振りかけ

て、その上にさらに死体を重ねるといった具合であった。地面は凍り、人々は体力に乏しく、掘られた溝穴に対して死体があまりにも多かつたからである。僕自身栄養不良が進み、下腹だけがポクツと飛び出し、鶏の足のようにやせ細ったすねの膝頭ばかりが目立っている。近年写真報道された、アフリカの飢餓に苦しむ難民の少年に、当時の自分の姿を重ねて思い出す。そしていじけた目つきをして、部屋の隅にうずくまっているだけの日々を過ごしていた。希望は何もなかった。ただ腹だけが空いていた。

「みんな死んじまえ！」これが、ひがみ切った僕の口癖だった。墓地の話などは、すべて大人たちからの聞きかじりである。この間、日本への送還のうわさが何回も流れては消えていったが、人々は「そんなことあるはずはない」と疑いながらもやはり期待し、そして結局落胆する。これの繰り返しだった。

このころになると、ソ連兵が拉致していった女

性たちのその後について、僕はある程度の予測がつくようになっていた。見聞の回数が増えるにつれ、暗示するものが見えてきたのである。そしてこの下宿屋にも、ソ連兵が代わる代わる女あざりにやってきた。情報が入ると、女性たちはさっと隠れる。向かいの部屋には、新婚さんらしい二人が住んでいた。奥さんが逃げる。部屋に土足のまま侵入した兵は、いち早く化粧の残り香に気付き、鼻を鳴らしながら夫にしつこく迫る。女性たちは顔に鍋墨を塗ったり、髪の毛を切り落としたりするのだが、彼らの獣並みの直感と欲望の前では無力であった。僕がたまたま二階の窓からのぞいているとき、当時五十代前半の祖母が外出から戻ってくる途中に、右手の坂上でソ連兵に捕まったのが見えた。父は急いで裏口から飛び出して行って、ソ連兵と話し合い祖母は解放され、父と一緒に無事戻ってきた。六年生の姉も、危機一髪のところを助かった。坊主頭にして用心していたが、風邪をひいて伏せていたので逃げ遅れた。病気では

あるし、まだ子供だからと運を頼むしかなかったのである。ソ連兵は掛け布団を尻からまくり上げた。祖母が必死になって「病気だ、駄目、駄目」と仕草で訴えていた。身体を見て子供と分かったのか、やがてあきらめて出て行った。

収容所の中に器用な人がいて、門扉に秘密の細工を施してくれた。外に出て扉を開めると自動的に棧ぎんが下りて施錠され、入るときは目立たない箇所かどに隠してあるひもを引くと棧が上がって扉を開けることができる仕組みであった。この細工のおかげで、ソ連兵の侵入は治まっていた。「ヤポンスキ・マダム・イツソ（いるか？）」彼らがしゃべるこの言葉は、今も激しい憎悪の感情と共によみがえってくる。

六 富坪収容所

北朝鮮方面からの避難民は、富坪日本人収容所に収容されることになった。ソ連軍の命令によるものだろう。昭和二十年十二月二日午前六時、咸興駅前ハムギンに保安隊に取り囲まれたまま、午後五時

で待機させられた。厳冬の冷え切った地べたに座ったままの十一時間である。姉と妹は発熱し、僕は会寧脱出以来の夏服。ズボンはボロボロになってしまったので捨て、姉のスカートにズックの運動靴という姿だった。やつと無蓋車に乗せられ、午後九時ごろ富坪駅に着いた。周りは真つ暗闇、みぞれも降っている。どのくらい歩けばよいのか見当もつかない。熱のある姉は、とうとう田圃の積み藁の上に倒れ込んでしまった。今、地図を広げて見ると、咸興から鉄道で南に約三十キロメートルの場所に、富坪里という名の駅が見付かる。多分ここに収容所があったのだろう。そこには旧日本軍の演習場兵舎があった。かつて、咸興には歩兵第七十四連隊が駐屯していたので、富坪は広い原野とほどよい丘陵などで、戦闘訓練には適した場所であった。兵舎は緩い斜面に九棟、整然と並んでいる。出身地別に、九つの分会に分かれて住むことになった。僕は会寧方面からの避難民が集まった第六分会で、父がその分会長に推され

た。

建物は木造平屋建てで、東西に横長に建てられていた。その中央が通り抜けの出入口になっていた。左右の両翼は間仕切りのない大部屋であった。大部屋は真ん中にある通路を挟んで、両側が一段高い板張り床の居室になっていた。通路にはコンクリート製のペチカが造り付けられていたが、構造が悪いのか、燃えが悪く実際の役には立たなかった。窓ガラスは全部割れていて、板が打ち付けたであった。最初は、手当たり次第に板をはがして燃やしたので、部屋には煙が充満し息苦しかった。防火上も良くないと、室内での焚き火は禁止になり、禁を破った老教師が保安隊に銃殺され、以後焚き火は止んだので部屋の空気は澄んだが、寒さは厳しかった。

北部からの避難民は、八月以来の流浪の生活で、着ているものは夏服のままであったので、咸興の日本人住民から古着を分けてもらったが、零下三十度の富坪の寒気に耐えられず、どんどん死んで

いった。死因は凍死だけではなく、栄養不良による餓死などもあったが、何といても前に述べた「再帰熱」という伝染病によるものが一番多かった。媒介するのは虱しらみで、一人一人に数百匹が巣くっていたといわれ、死んで体温が下がり始めると、たかっていた虱が音を立てるほど列をなして周囲の人にたかつていくといわれたくらいであった。死者が着ていた着物は、パンツ、腰巻きだけを残してみんなの保温用に役立った。埋葬が間に合わなかったため、菰こもに包まれた遺骸が出入口の土間に並べられていったが、そのうち建物の周りに掘ってあった塹壕が利用されるようになった。

二十一年二月ごろになると、ソ連軍から蒸気滅菌車が週一回程度派遣されるようになり、衣類にたかっていた虱は高温蒸気で退治されることになった。それまではドラム缶に沸かした湯で衣類を煮沸していたが、間に合わず、普段は脱いだ衣服を裏返して縫い目の折返しに一列に並んでいる虱を、両手の親指の爪で潰していった。血を吸って腹の膨

れている風は、ぷちつと音を立てて小気味よく弾けるのだった。しかし、多くの人は栄養失調で病人に等しく、力のいる作業はできず、うつろな瞳を宙に浮かせるのろと歩くだけの、薄汚い無気力な生き物になり果てていた。

共同便所は戸外にあった。正面入口の前の石段を十数段下りた右側にあり、中に入ると右手は小便用の溝、左手には大使用が六つ並んでいる。零下の外気を突いて通うのは、大変な覚悟がいる。重病人が兵舎まで帰れず、軒下に倒れて翌朝亡くなっているのを発見されたこともあった。

大分暖かくなってきたころだった。僕が大便所に入ると、金隠しの所にボロ切れに包まれたドッジボールほどの包みが置いてあった。指先で端から布をめくってみたが、ボロ切れは何重にも巻かれていて中身は姿を現さない。得体が分からないままに、薄気味悪さが募って途中で止めて帰った。翌日、蓋のない汲み取り口から、嬰兒の死体が汚物の中に浮いているのが発見された。僕はピンと

きた。僕のあとに入った人が、ボロ切れの包みを開けてしまったのだろう。この小さな仏も大人たちの手によって清められ、菰にくるまれて、塹壕穴の半ば溶け始めた雪の上をすーっと滑っていったという。

二十年十一月に、咸興の下宿屋の二階で産婆さんに取り上げられた三番目の妹は、美子と名付けられた。美子が生後一カ月が過ぎたころ、肺炎にかかった。収容所第一分会におられた、ただ一人の医者のもとへ母が駆け付け、貴重だったであろう注射を打ってもらったが、美子はチアノーゼを起こし危篤状態になった。オロオロしている母に「胸を蒸しタオルで湿布し続けること、生のタニシのしぼり汁を飲ませなさい」と、知恵を授けて下さった方がいて、母は早速実行に移した。稲の切り株が並ぶ薄氷に覆われた水田に、タニシは生きていたのである。奇跡的に妹は助かった。

七 紀子の死

手持ちの金も底をつき、朝鮮人の集落で残飯を

もらったりして露命をつないでいたが、避難民全員は飢餓地獄をさまよっていた。ある日、父が朝鮮農家から薪集めの雑役を見付けてきた。今思うと、恐らくこの農家の好意と同情から、わざわざ仕事を作ってくれたのだと思うが、父は僕も連れて行くという。村外れの入会地と思われる雑木林についていった。僕も当然手伝うつもりでウロチヨロしていたら、雇い主は、軽い仕事を言いつけただけで放任してくれた。夕方、僕にとってはその唯一最大の目的の夕食の時間になった。何カ月ぶりであろうか、大きなどんぶりに盛られた白い米の飯、その上には干し鱈をほぐしたものなど、いろいろな具がのっていた。僕は目を白黒させてパクついた。食べ終わって所在なくしていると、農家のお嫁さんらしい人が、釜の底にこびりついたお焦げを持ってきてくれたのである。朝鮮では、このお焦げにお湯を注いでお茶として飲むのである。実に香ばしく、子供らにとってはせんべい同様の美味しいお菓子になった。手のひらより少し

小さめのその食べ物は、僕をこの上なく幸福にしてくれた。一足先に帰ることになり、お焦げを手に駆け出した。このとき、どういう風の吹き回しか、餓鬼道に堕ちている僕にふと仏心が萌もぎした。これを病床にある妹、紀子に食べさせたらきっと喜ぶに違いないと、心が弾んだのだ。だが、帰りの途中、強い誘惑に負けて、お焦げの縁の方から一かじり一かじりして行って、とうとうボタンほどの大きさに減ってしまった。妹の枕元に寄って「これ食べる？」と声を掛けた。高熱にうなざれていた紀ちゃんは、それでも薄目を開けて一見するなり、心外にも「治ってから食べる」と一言いつてまたうなり始めた。飢えていたはずだ！お腹が空いていないはずがない！それでも今は食べる気にならないほど苦しいということだったのだらう。ほどなく紀子は「左の耳から水を飲みたい」という、うわ言を残して死んでいった。

八 食べ物

收容所の食糧事情は、朝鮮当局にも知られるこ

とになった。惨状を調査報告した幹部の進言と努力の結果、米と副食が支給されることになったのである。副食というのはニシンの粕漬け一種、こんな美味しいものが世の中にあるとは知らなかった。我が家では、せつかくの栄養が逃げるとして米は洗わずに炊いた。沸騰が収まり始めた段階でも、粕を落とさずニシンを米の上に並べて炊きあげる。ご飯に粕の味がしみこんでうまい。この配給のおかげで、皆が体力を持ち直したのである。

さて、次に書くような生き方をする人を何と呼べば良いのか、小悪党という呼び方は、この人たちの場合にはより確信的だから当たらないだろう。大柄の、いかつい顔の持ち主だったが、名は〇さんといった。収容所は東西両翼の端にも出入口が設けられている。この入口は二重扉になっていて、扉と扉の間はちよつとした部屋みたいになっていた。〇氏は真つ先に、西翼のこのスペース全体を独り占めにした。他の全員が、大部屋に折り重なるようにして雑居しているのをよそ目に、

個室を確保したわけである。ちなみに、東翼の方は本来の出入口として活用されていた。この男はことほど左様に我利我利亡者で、他人よりは薪一本でも多く、畳の目一つでも広く取って得したい、という態度が見え見えだった。

配給の米がかまに入って届いた。配給は中央通路の真ん中で行った。飯盒の中蓋を升にして、各家族の人数分を量って分ける。それは、分会長としての父の役目である。配給の順番を待つ人たちは周囲を取り囲むように並んでいて、少しでも不公平のないように監視する目付である。米を分ける父の手つきは、ひいき目に見てもいかにも不器用で、とても能率的とはいえない。このとき、「そんなんじや駄目だ」と言って飛び出してきたのが例の〇氏である。父と交代すると、手つきも鮮やかに分配し始めた。つぶさに観察していると、蓋にすくった米をならず〇氏の小指が、微妙に湾曲している。微妙に米が少なく量られているのである。大人たちもこれに気付いてブーイングが起こり、

○氏は引つ込む運びとなった。大多数の人は地獄さながらの状況にあつても、公平感や思いやりの精神を失いきつてはいなかった。僕は未だに○氏の生き方に憤りを感じるのである。それにしても、あんなやり方で余らせた米を、どういう手を使つて私する気だつたのだろうか。

少し暖かくなると、荒野に萌え始めた野草は貴重なビタミン源である。私たちは毒草以外は何でもお浸しにして食べた。アカザは少しばさばさした感じ、ノビルは香ばしく、スミレのぬめりも美味しかった。里の人からもらつた食品で忘れられないのは、ジャガイモチジミとヒルガオの根である。チジミは今日では日本でも知られるようになったが、僕はこのときが初めてで、色は薄黒く不潔そうに見えるが、口にすると美味しかった。ヒルガオの根は太いものでも赤ちゃんの小指くらい地下茎であるが、これも蒸かして食べる。外皮の色も味もサツマイモとそっくりで、甘さは落ちるがやはり美味しかった。

九 二人の級友

第六分会には会寧国民学校の同級生が二人いた。一人は川崎君といって校長先生の長男、もう一人は確か中野、あるいは上野君といったと思うが、お菓子屋さんの子である。そのお菓子屋さんは、郡守官舎から坂を下りて本町通りを少し左に行つた左側にあつた。川崎君は、転校生の僕とよく一緒に遊んでくれた。家に上げてもらったとき、二人して押入れに隠れて、中であつたせんべい状の酒粕を生のままかじつたことを思い出す。

中野菓子店には、商品はもう何もなかった。遠足が近いある日、珍しくキャラメル箱が並んだのを目ざとく見付けた。母に告げて買ってもらつたら、中は梅干しだったのでがっかりしたことを思い出す。

再帰熱などで、人がばたばた死んでいったことは前にも書いたが、家族構成は知らなかったが中野君一家も彼一人を残して次々に亡くなつてしまつた。

「一家全滅」、これは当時の流行語であった。中野君のお父さんは、敗戦間際に召集されて家族とは一緒ではなく、年寄りと子供だけの所帯だった。家族の最後の一人が亡くなった夜、西側の大部屋から中野君の大きな泣き声もれてきた。ところがこれが泣き声ではなく、大変芝居がかった台詞なのである。普段は無口な子なのに、「このことをお父上がお知りになったら、さぞやお嘆きになることでしょう」などと、流暢に話し続けるのである。どうしようもない悲しみや不安が一度に襲いかかったとき、人はこんなにも極端に走るものと、強く印象に残った。

川崎君の場合、お母さんは富坪入所前に既に亡くなっていて、お父さん、お姉さんとの三人暮らしだったのだが、やはりお父さんがここで亡くなった。六年生のお姉さんとたった二人になった川崎君と、偶然宿舍入口付近で会ったことがある。彼に「お使いの駄賃と一緒に食べた冷麺、美味しかったねえ」と話しかけたのに、彼は無言、無表

情のまま去っていった。人格が、すっかりうつろになってしまっていた。川崎姉弟は後に孤児院に入った。合同慰霊祭が行われた日、これも偶然だったが、川崎君が僕のすぐ前に並んでいた。彼の背中を見ていると、垢や油煙で汚れた服の縫い目に沿って虱が這い上がっていた。

私が三十代のころの新聞に「引揚げ体験談」の投稿をしたことがある。それが朝日、毎日、読売各新聞に掲載された。その都度、読んだ二、三の方から手紙や電話を頂いたが、同級生からは全然反響はなく、また引揚者の会員名簿にも同級生の名は見当たらなかった。四十数人はいたであろう会寧小学校の同級生の中で、生き延びたのは僕一人ということなのであろうか。入所時三千人いた収容者が、昭和二十一年五月遅い春を迎えたときには、千六百人に減っていた。第六分会の場合、入所者三百五人中、百五十五人が死亡したと記録されている。これほどの高い死亡率を持つのは、アジア全地域の引揚者の中でも突出した事例では

ないだろうか。

ソ連軍は、こんな所まで旧軍人探しにきており、第六分会からは入所直後に十人の元軍人が連行されたと、父のメモに残っている。してみると、入所中の犠牲者は、百パーセント非戦闘員の一般市民であった。共同墓地に「この地に死亡した日本人の冥福を祈り、残留日本人建立」と刻んだ木柱を建てたところ、翌日には倒されていたという。結局、松の木に「嗚呼戦災日本人之墓」と記して墓誌とした。

五月五日合同慰霊祭が本部前広場で執行された。父が代表して弔辞を読むと、生き残った千六百人のむせび泣きが山にこだまするほどであった、と伝わっている。

十 富坪脱出

冬の間、夜の闇に銃声が響く日もあった。脱走者は銃殺されても仕方がないわけだが、一日も早く日本に帰りたいという思いが強く、一か八か賭けにでる人たちもいたのである。思いはだれも変

わらない。四月初め頃、自治本部では体力がある者を引率者として病人十人ほどの小さな集団を午前三時ごろ脱出させた。少なくとも富坪付近では発見されずに済んだが、これが原因となって無償だった米の支給が有償になった。次は、孤児約百五十人の中から七十人が選ばれ、女性の引率者十人を付けて脱出させた。その中の約半数が、博多に上陸したとの情報が伝わってきた。

朝鮮側は表向きは厳しく追及してくるものの、黙認しているようにも見えた。そこで、四月から五月にかけて集団脱走計画が秘かに練られた。もう大分暖かくなり、行動が楽にもなっていたのである。

結局は「移住証明書」という手段を利用して、半ば公然と移動することになった。五月二十三日、富坪駅から有蓋貨車で出発した。貨車の扉を閉め切ったまま隠密に南下したのだが、鉄原辺りで見付かって逆戻りさせられたのである。しかし、もうさいころは振られていた。良く覚えていないが、

劍沸浪とかいう辺りで強行下車、有名な「三十八度線突破」を執行するために歩き始めた。当時、北緯三十八度線を境に北側はソ連軍、南側はアメリカ軍が実質的支配者であった。三十八度線をまたいで往来することは禁止されていて、境界線北側はソ連軍の厳重な監視下に置かれていた。越境が見付かったら銃殺である。この警戒線を強引にくぐり、日本に一步でも近づきたいという悲願を込めて、「三十八度線突破」という言葉が使われていたのである。ソ連兵に発見されないように潜行するのだから、必然的に険しい山道を選ぶことになる。小集団に分かれて、十日間ぐらい山中を歩き続けた。雨の中、急斜面を下っていて足を滑らせて、仰向けに倒れたことがある。濁流が襟元から入って、背中を流れ抜けていった。そして、ついに境界線の山脈の麓にたどり着いた。この山の頂上を越えれば南朝鮮である。

「今夜半突破決行」ということで、暗くなるまで山腹の木陰に腰をかかめ、息を殺して待機して

いた。日が暮れてくると大きな螢が周囲を飛び交い始めた。隣に潜んでいた父が、急に腕を振るってホタルを捕まえたと思ったら、僕の手のひらに握らせた。八月家を出て以来、父が初めて見せた優しさであった。心にぱつと灯がともったようになり、がちがちだった僕の緊張が解けていくのだった。

ところが、いつまで経っても案内人がやって来ない。我々は一人当たり五円を出して、土地の事情に明るいと称して案内役を売り込んだ男を雇ったが、何のことはない持ち逃げされたわけであった。こちらは大つびらに動けない弱みを持っている。そこにつけ込んだ見事な詐欺、恐らく常習犯だったのだろう。

深夜に通りがかったおじいさんがいた。この人は、鶏を入れた背負い籠を背負って、南北を往来して商売をしているという。心の優しい人で、金の要求をするでもなく、黙々と先頭に立ってくれた。明け方、眼下に朝靄に霞む集落が見渡せた。

開城（当時は南側地域）の近くに出ていたのだ。
ついにきた。僕は生きていた。代わりに祖父と
二人の妹は死んでしまった。

鎮魂！ 東三丁目のコムロさん

東京都 木村 親孝

今から五十九年前の夏、昭和二十（一九四五）
年八月九日に、朝鮮・満州国とソ連との国境の随
所から、突如としてソ連軍が侵攻してきました。

その時、私たち家族は朝鮮咸鏡北道慶興郡阿吾
地邑灰岩洞東二丁目四五番地に所在していた、
朝鮮人造石油株式会社の工員社宅に住んでいまし
た。私は、前年の昭和十九年三月に、農圃国民学
校を卒業して人造石油会社直営の炭鉱である、
承良鉱業所に勤めましたが、父の転勤に伴って、
当時は灰岩洞の社宅に家族と一緒に生活をしてい
ました。

その日、会社から「十四歳以上の男性は全員、
工場防衛隊に参加せよ！」という指示があり、夕
方に父と一緒に工場に向かいました。私は、昭和
七年十二月十三日生まれですから、現在の年令の